

乃ち吏を遣はし、廉問し、遂に兩村長の職を概ひ、當時の郡宰以下を追咎し、黜罰差あり。節女の家に白金を賜ひて、存卹せしめ、以て之を旌せられしと云ふ。

米溪子曰く、正女は一微賤の女子、別に教養の素あるにわらず、而して、其の貞烈、人をして襟を正さしむるものあり。聞く、秦西の風、死を以て罪惡となすとかや。處するに道あるに拘はらず、敢て身を傷ふは、固より論ずる所にわらずと雖とも、欲する所生より甚しきものありとすれば、正女の如きは、蓋し其の欲する所を得たるに庶幾からんか、國各風あり、俗あり。國風嚴として、以て萬國の間に卓然たるを得んとす。徒らに、之を顧みずして、彼に馳す、本を忘るゝの譽を免かれざらんか。今や朝野、女子、道を學ぶものに付

て、論ずる所囂々たり、之れ果して、國家の爲に喜ぶべき現象なるか、女學校教育は、歐米に於ては良妻の資格たり、我が國に於ては、不良妻の資格なり、と叫ばしむるに至れるは、仰も、其の貞婉の徳、仁厚の風、婦たり、母たるの素を養ふ所以に於て至らざるものあるによらずとせんや。正女の如きは、封建の余風に化して、遂に凛烈、節に死するもの、固より、今日の倫道に於て律すべからざるものありと雖とも、抑も亦我が國風の存する所、今日の弊に鑑みて、又他山の石たらずんばわらざるなり。

(元)

黒澤登幾子 (承前)

下村三四吉

登幾子が京都に上りて藩主の冤を訴へんとを決

心は、いとも固くして動かすべからざるほどなりしも、また母のおもはくは如何ならんと案じわづらへりしに、母はその忠節と熱心とに感じて却てその事をすゝめたるは、前回に述べたるが如し。登幾子は、勇み立ちて出發しぬ。母はよろこびてこれを送りぬ。されど、前途は測り知るべからず母子の再會は或は期し難かるべし、固より覺悟せるところとはいへ、その間また暗涙を呑むの悲みながらんや。想ふてここに到れば、當時悲壯の風景眼前に髣髴として、感慨胸にせまるの思ひあり。

時はしも安政六年の二月なり。嚴霜雪の如き晨、先づ鞋痕を印して、登幾女は、鍋高野村を出でぬ。常にても婦人の旅行は容易ならざるに、まして當時は幕府の偵察甚だ嚴密なれば、忽ち發見

捕縛せられん慮りあるを以て、寢を食ひ笠を蒙り。廻國巡禮の姿にやつせり、寒威何かあらん、險途恐るゝに足らず、恐るゝところは京都に到着せざる間に幕夫の妨碍にあうて素志の水泡に歸せんことはなり。

かゝれば、江戸に出で、東海道を上るべき順路に就かずして、なるべく注目を避けんために、中山道を取りぬ。先づ笠間より下野の小山に出で、佐野桐生等を過ぎ、草津を経て信濃善光寺に詣で、また戸隠山に上り、その戸隠權現に一首の歌を上り。

きみのため思ふねがひを雲井まで

みちびきたまへとがくしのかみ

陽氣の發するところ金石も亦透る。登幾女の至誠には神明も亦感格してその祈願を受納せりしなら

ん。

それより、伊奈道によりて本街道に出で、美濃近江を經過して三月廿五日に恙なく京に入りけり。守山にては關吏に誰何せられしかど、巧に之を欺きて危難を免れしといふ。途中の困難はもとより一二には止まらず、今はただ簡單に叙し去りたれど、餘は讀者の想察にまかせん。

長途の困難は幸に果てたりしも、訴訟の目的を達すべき困難は更に目前に迫れり。されど、思慮に富み加るに誠意熱心なる登幾女は、自己の修養深き歌學に因りて直にその便宜を見出だしぬ。そは外ならず。入京後一日を隔て、北野神社に參拜し、同社の慶圓坊の紹介にて、前大納言東坊城聰長卿の門に入りて和歌の修業を請へることこれなり。されど、當時卿は閉居中なりしかば、その

家臣座田綱貞に就きて教を受けたり。

三十六

かくて日を経るまゝに、登幾女は綱貞の人となりを知りしかば、一日時事の物語りの序でに、かねてつくれる長歌を出して見せけるに、綱貞も大にその篤志と詞藻とを感賞し、登幾女が請へるまゝに、これを聰長卿に達し、遂には卿より進めまゐらせて、叡覽を辱ふするに至れりといふ。あ、「君のため思ふねがひは「雲井まで」とどきたり。登幾女のよろこび察するに餘りあり。登幾女の詠進せる歌は

奉獻 天皇陛下歌并反歌

ちはやふる 神代のむかし 神々の しづめ
 たまひし 秋津島 げにもたふとさき 日本の
 清きひかりは 古へも 今も千とせの 末
 までも かはらぬ君が 御代なるを かくと

はいざや 白浪しらなみのよせくるごとくに 異國とつくにの
 ことうきふねの えみしらが あらぬ願事ねがごと
 つとつとに うけ引く國くにの あやまちは 井い
 伊いてふ人の ところから 御國みくにのおものは
 みながら まめまめしくも おもほえず あ
 やなくまどふ ぬば玉たまの 心のやみの くら
 がりし くるさまがねを かたらひて いさ
 をしあれど 咎とがのなき かしこき君きみを 押こ
 めて 黄金こがねのいろを 山吹やまぶきの 花はなちるごとく
 まさちらし 雲くもの上うへをも 恐れなき たく
 みのほどぞ あざましさ あざさたくみも
 おのづから うき世よの人の言ことの葉はに かかる
 悪事あくじを 傳つたへさく 身みは下しもながら 天照あまてらす
 神かみの御末みすえを くみてしる いさをもたかき
 藤原ふじはらの 流れのすゑの われなれば 聞きす

てならず 年としたけて 五十いその四よつに なりぬ
 れど 七十路ちそぢろ三さんの 母ははそぼの 老おひの齡よばひを
 みまほしと 教をの道みちを わざとして 細ほそきけ
 むりは たて居かりて 朝あさな夕ゆふなに つかへし
 も 事ことをつはらに わたらひて しぼしのい
 とま 乞こひければ ともにこゝろを 添そへら
 れて 御國みくにのために 時ときをえば 早はやとく行ゆけ
 と 老おひらくの 言葉ことばをすぐにも ちから草くさ 露つゆ
 をふくみし あざぼらけ 日も立た出いづる 衣ころも
 手の ひたちを出いで、しきしまの 道みちある
 御代みよを したひつゝ、杖つゑをちからの 旅たびの空そら
 たどるも君きみが 御代みよのため おもひつゞけ
 し 老おひが身みの 矢やたけ心こころは 春はるの野のを ゆく
 もかへるも梓弓あづまゆみ はるけき道みちを さゝがにの
 いともたゆまず 引ひのぼし 雲くもの上うへまで

かけはしを わたるおもひは 天さかる ひ
 なに生れし 塵の身の ちりつもるてふ 山
 の井の 深さこゝろの みなもとほ 流れて
 清き玉水の 中にすみぬる 魚こゝろ 拙き
 身をも わすれつゝ 御國のためと 朝夕に
 千々にこころは くだけども 只ひとすぢ
 に 引水の せみの小川に みそぎして は
 るんきぬる たびごるも あかつきながら
 うぐひすの 初音のこゑの ことふきや
 野末に匂ふ 梅が香を 天津空まで つたへ
 あげ 恐れ多くも 久方の 雲井の 庭にぬ
 かづきて まをす言葉を 守るなり
 反歌
 よろづ代をてらす光のますかひみさやかにう
 つせ賤がまごころ。

衣手のひたちを出て、しきしまの 道ある御
 代をたつねてぞとふ。
 たまばこの道はわれてもすゝみゆくやまとこ
 ろのこまはたゆまじ。
 梓弓はるけさみちをさゝがにのいとまたゆま
 ず空のうへまで。
 きよみがたきよらにすめる有明の月にくらべ
 んやまとこゝろを。
 (ついで)

